

# 第5回 黒潮町成人式

## 新成人の皆さん おめでとうございます



成人式を迎えられた方々を祝い、第5回黒潮町成人式が1月3日、ふるさと総合センターで行われました。

今年、黒潮町内で対象となる新成人は、平成2年4月2日から平成3年4月1日生まれの140人（男77人、女63人）で、昨年より5人減。高知県全体では、7698人（男3830人、女3868人）と昨年を160人上回り、7年続いた減少に歯止めがかかりました。

年末から元旦にかけての大雪も溶け穏やかな晴天となったこの日、会場には艶やかな着物やスーツ姿の新成人が集まり、久々の再開を喜び合うなど華やかな雰囲気になりました。

式典では、町長や県議会議員、町議会議長らの祝辞に対し、新成人代表の濱村明日美さんが答辞。中学時代の思い出や大学生活で感じることを語るとともに「人々の価値の多様化、少子高齢化、地域格差とさまざまな社会問題が山積みしている現代社会。こんな時代だからこそ、たくさんの人々の支えになれるよう一人ひとりが思いやりを持ち、自分の意思をしっかりと持

ちながら社会の一員として貢献していきたいと思えます」と、たのもしき誓いの言葉を述べてくれました。

また、大方吹奏楽団による記念コンサートも行われるなど、和やかなながらも気の引き締まる式典となりました。



答辞を述べる濱村明日美さん。将来は立派な教師になるのが夢とのこと。

新成人の皆さんは晴れて大人の仲間入りをされ、社会の一員として自覚と責任が求められる人生の大きな節目を迎えられました。苦境にめげることなく、それぞれの目標に向かってまい進されるとともに、これからの社会づくりのための原動力となれることを心から願っています。

**復活！若山楮で地域活性化**

和紙の原料となる楮こうぞの蒸し剥ぎ体験イベントが12月19日、拳ノ川地区の「土佐佐賀温泉こぶしのさと」敷地内で行われました。



町内の楮栽培農家で紙漉き職人でもある中嶋さん(左)に教わりながら皮剥ぎ作業をする大方高校の生徒の皆さん。

同地区はかつて、良質な楮の産地として知られ、50年ほど前まで盛んに栽培されていました。一度は途絶えてしまった若山楮を復活させようと、3年前から「佐賀北部地域協議会(矢野元会長)」が休耕田や山の斜面を利用し栽培に取り組んでいます。今年の収穫量は1・2tで昨年の2倍以上。前日までに、協議会のメンバーや町職員らが3×4mに育った原木を刈り取りました。

朝晩かなり冷え込む拳ノ川。

当日は早朝4時から専用のかまどに火を入れ準備開始。大きな樽をかぶせて2時間ほど蒸しませます。



樽を持ち上げると、あまい香りのする湯気の向こうに蒸しあがったアツアツの原木が姿を現します。

蒸した原木は根元の部分を両手でしっかりと握り、左右に4〜5回ねじると皮が離れて簡単に剥ぐことができます。見物に来た方の中には「懐かしい。あの作業が難しいがよね」と経験者の女性も。

若山楮は、文化遺産の修復に使われる和紙の原料に適していることから需要があり、また、佐賀地域の小学校では卒業証書を手漉き和紙で自作するなど、若山楮全盛期の輝きを取り戻しつつあります。

**新記録続出！少年駅伝大会**

黒潮町子ども会育成連合会と黒潮町教育委員会が主催する「第5回黒潮町少年駅伝大会」が1月10日、佐賀中学校をスタートし県道中土佐佐賀線を周回する5区間6・7kmのコースで行われました。

町内外から男子の部に20チーム、女子の部に16チームがエントリー。連日続いた冷え込みも緩み、晴天・無風の好条件となった今大会は、コース記録、区間記録が合わせて18も塗り替えられる“飛躍の大会”となりました。



早朝から沿道には近所の方や保護者らが陣取り、懸命に走る選手が近づくと「がんばれ！あと少し！」。チームを問わず熱い声援を送っていました。

<p>【男子の部】※新はコース新記録</p> <p>1位 三崎小学校 24分31秒</p> <p>2位 具同ボーイズ 24分33秒</p> <p>3位 東山小学校 24分41秒</p> <p>【女子の部】※新はコース新記録</p> <p>1位 具同レインボー 25分29秒</p> <p>2位 中村南小学校 25分54秒</p> <p>3位 東山小学校 25分57秒</p> <p>新 新 新</p>	<p>【区間賞・男子】※新は区間新記録</p> <p>1区 1・5km 猪合進示 5分4秒</p> <p>(三崎小学校)</p> <p>2区 1・4km 東俊介 5分7秒</p> <p>(東山小学校)</p> <p>3区 1・3km 土居耕大 4分46秒</p> <p>(チーム三浦A)</p> <p>4区 1・0km 細川優輝 3分37秒</p> <p>(三崎小学校)</p> <p>5区 1・5km 井上聖也 5分5秒</p> <p>(チーム三浦A)</p> <p>新</p>
<p>【区間賞・女子】※新は区間新記録</p> <p>1区 1・5km 宮川成美 5分6秒</p> <p>(チーム入野A)</p> <p>2区 1・4km 濱口菜月 5分7秒</p> <p>(具同レインボー)</p> <p>3区 1・3km 山本玲奈 4分50秒</p> <p>(具同レインボー)</p> <p>4区 1・0km 新谷美怜 4分2秒</p> <p>(中村南小学校)</p> <p>5区 1・5km 池本有加里 5分22秒</p> <p>(中村南小学校)</p> <p>新 新 新 新 新</p>	

カツオの保護や可能性を探る  
◆「日本カツオ学会」発足

将来にわたって日本人とカツオとの「上手な付き合い方」について考え、カツオに関する情報交換や多面的な事業を推進する「日本カツオ学会」が1月8日、黒潮町総合センターで発足しました。



会長に愛媛大学・若林良和教授、副会長に高知大学・受田浩之教授、大西勝也町長らが選出されました。

カツオ漁は平成21年、戦後最低の大不漁に見舞われ、一本釣り漁師からは「カツオがこれまでのように獲れなくなってきた」という懸念の声も挙がっています。

そこで、カツオを資源として捉え、その実態や現状を把握することでカツオの保護や可能性を探っていくと、全国16の自治体と学術関係者12人を発起人に学会が設立されました。

学会にはカツオ産業の盛んな自治体関係者や研究者らが大勢集まり、鹿児島県枕崎市でのフォーラムの開催や年3回程度の会報誌発行など、今後の取り組みを決定。カツオに関心を持つあらゆる人々が、カツオについて総合的に考える機会を提供していくことを確認しました。

◆「カツオ・シンポジウム」開催

続いて開催された「黒潮一番地カツオ・シンポジウム」は3部構成。町内の参加者が加わり熱気に包まれた会場では、それぞれのテーマについて研究者や漁業関係者らがパネルディスカッションを行いました。

まず第1部は「カツオの生態と資源を考える」をテーマに、茨城大学の二平章研究員が「熱帯海域での巻き網漁により、日本海域に北上するカツオが減少している」と指摘。「このまま放置すれば一昨年の大不漁が定期的に起こる」としました。さらに、パネリストとして登壇した第123明神丸・明神正一漁労長と第88正丸・上牧英雄漁労長(宮崎県)は、「十数年前からカツオが少なくなっていると聞いているのに水産庁は動かない。

巻き網漁の漁獲量を制限するなど国の介入が必要」と、現在の一本釣り漁の課題を訴えました。



「カツオを熱く語るか」と「カツオを熱く語るか」という問いかけに、漁師は「命をとりかかるといっている」と現場の状況を説明した。上牧英雄漁労長(左)と明神正一(右)。

第2部は「カツオの利用と流通を考える」をテーマに、高知大学の受田浩之教授が、昨年行った「カツオ摂取によるアンセリン調査」を紹介。黒潮町に水揚げされた日戻りカツオのアンセリン含量調査や、黒潮町役場で約3カ月にわたり調査したフリーカーテストの結果(14ページ参照)をもとに、「地産地消

地検(地域の資源を地域で食し、その健康増進効果を地域で検証する)の取り組みを加速して、強いブランド化の構築に生かすべき」と提案しました。

第3部は「カツオの文化と地域の活性化を考える」がテーマ。愛媛大学の若林良和教授を中心

に、各地域でカツオを生かした取り組みを行っているパネリストらがお国自慢をしました。

黒潮町からは、県漁協佐賀統括支所女性部長の境文子さんが昨年に引き続き参加。11年間携わってきた「カツオのタタキ体験」での取り組みを報告し、「昨年は修学旅行生を3500人受け入れることができた。今後はリピーターをもっと増やし、『タタキ体験と言えば黒潮町』と言われるようがんばりたい」と抱負を述べました。



「タタキ体験をしたお客さんからお礼の手紙が届くんですよ」と自慢する境文子さん。

シンポジウムは、パネリストの熱のこもった討論で持ち時間をオーバーするほどの盛り上がりを見せました。最後に会長の若林教授は「カツオの価値を一般の人たちにどう伝えていくか、今後どんな情報を発信していきます」と締めくくりました。